



2026年度 第2回 瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

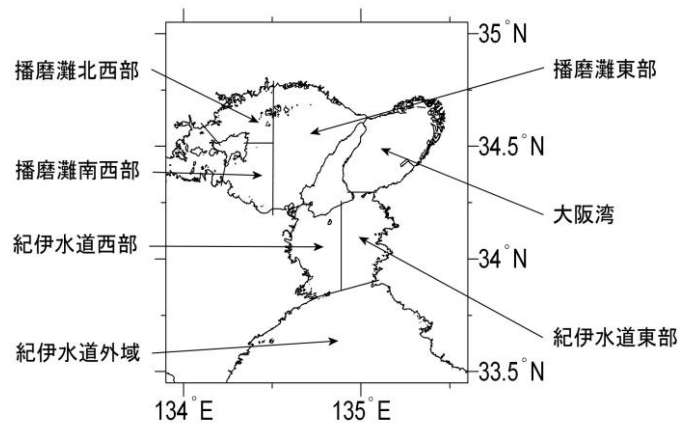
今後の見通し（2026年7月～8月）のポイント

(1) 概要：

シラスの漁獲量は紀伊水道西部で平年並み、そのほかの海域では平年を下回る。
カタクチイワシ（小羽から大羽）の漁獲量は平年を上回る。

(2) 海域別：

紀伊水道東部のシラスは不漁であった前年並みで、平年を下回る。
紀伊水道西部のシラスは不漁であった前年を上回り、平年並み。
大阪湾・播磨灘東部・播磨灘南西部・播磨灘北西部のシラスは不漁であった前年を上回るが、
平年を下回る。
大阪湾のカタクチイワシは不漁であった前年、平年を上回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：浮魚資源部（廿日市） 山下、河野
電話：0829-55-0666、ファックス：0829-54-1216
当資料のホームページ掲載先URL
<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2026年度第2回瀬戸内海東部カタクチイワシ漁況予報

1. 今後の見通し（2026年7月～8月）

シラス（本年夏季発生群）

紀伊水道東部では不漁であった2025年並みで、平年を下回る。

紀伊水道西部では不漁であった2025年を上回り、平年並み。

大阪湾・播磨灘東部・播磨灘南西部・播磨灘北西部では不漁であった2025年を上回るが、平年を下回る。

カタクチイワシ（小羽から大羽）

大阪湾では不漁であった2025年、平年を上回る。

標本漁協、もしくは標本船の漁獲量を各海域の代表値として予報を作成した。2016年～2025年の平均値を平年値とした（図1～図5）。

2. 漁況等の経過（2026年4月～6月）及び今後の見通し（2026年7月～8月）についての説明

(1) シラス漁況

紀伊水道東部（和歌山県側）では4月の漁獲量は前年の464%、平年の167%であった。5月は前年の158%、平年の50%であった。

紀伊水道西部（徳島県側）では4月の漁獲量は前年の474%、平年の14%であった。5月は前年の1,254%、平年の138%であった。

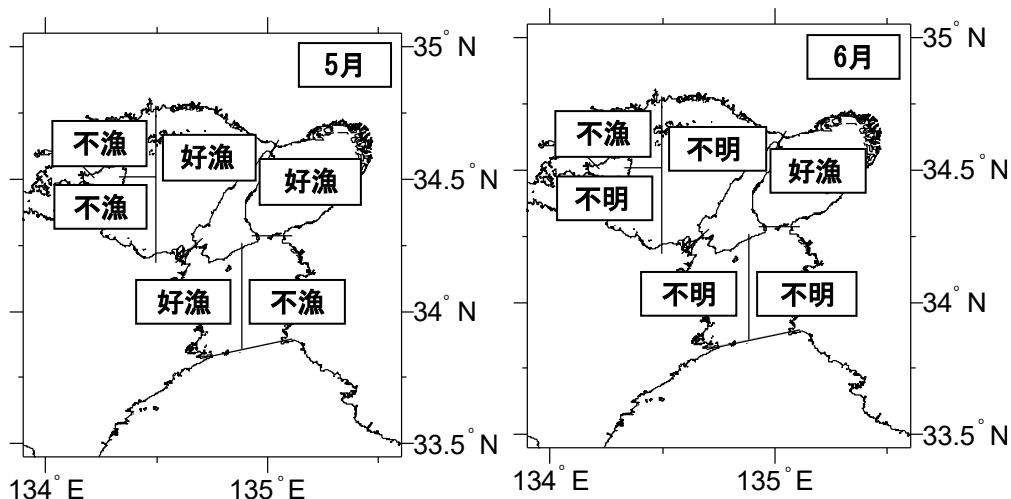
大阪湾（大阪府）では2026年の漁は4月20日から本格的に始まった。4月の漁獲量は平年の190%（前年0トン）、5月は前年の418%、平年の229%であった。6月も引き続き、好調に推移している。

大阪湾（兵庫県）では2026年の漁は前年より35日早い4月14日から始まった。4月の漁獲量は平年の261%（前年0トン）、5月は前年の1,079%、平年の322%であった。

播磨灘東部（兵庫県側）では2026年の漁は前年より16日早い5月18日から始まった。5月の漁獲量は平年の1,722%（前年0トン）であった。

播磨灘南西部（香川県側）では2026年5月下旬から漁期入りしたが、魚影がみられず、5月は操業がほとんど行われなかった（前年0トン、平年9トン）。

播磨灘北西部（岡山県側）では2026年の漁は前年より13日遅い6月8日から始まった。6月の漁獲量は15日現在で前年の52%、平年の48%である。



2026年5月～6月のシラス漁況

(2) カタクチイワシ卵仔魚

大阪湾における5月の卵採集数は前年の55%、平年の112%であり、6月は前年の35%、平年の36%であった。5月の仔魚採集数は前年の52%、平年の145%であり、6月は前年の23%、平年の24%であった。

播磨灘全体における6月の産卵量は前年の3,656%、平年の122%であった(図5)。播磨灘東部(兵庫県)では前年の3,127%、平年の188%、播磨灘南西部(香川県)では301粒/m²(前年産卵なし)、平年の34%、播磨灘北西部(岡山県)では前年の7,973%、平年の38%であった。6月の仔魚採集数は播磨灘東部(兵庫県)では平年の220%、播磨灘南西部(香川県)では平年の10%であった。

(3) 黒潮流路の現況と今後の予測(2026年7月~8月)

6月14日現在、黒潮は室戸岬~潮岬沖で接岸している。各岬における黒潮離岸距離の変動傾向と水産研究・教育機構運用の海況予測システムFRA-ROMS IIによる予測結果、及び最近の黒潮流路の推移等を併せて考慮すると、紀伊水道沖付近の黒潮は6月中旬~下旬に一時的に離岸傾向となるが、その後は接岸傾向で推移すると予測される。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972):海洋物理II、東海大学出版会を参考にした。

(4) 今後の見通し(2026年7月~8月)

シラス(本年夏季発生群)

本漁期に黒潮は紀伊水道沖付近では概ね接岸傾向で推移すると予測されており、シラスの来遊環境は良いと考えられる。

紀伊水道東部では外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察されるが、今後の漁況は主に内海発生群に左右されると考えられる。大阪湾での6月の卵仔魚採集数から判断すると不漁であった2025年並みで、平年を下回ると考えられる。

紀伊水道西部でも外海発生群及び内海発生群が漁獲されていると推察される。大阪湾での6月の卵仔魚採集数は前年や平年を下回っている。一方で、紀伊水道西部において成魚を漁獲対象とする漁業者への聞き取りによると、5月の漁獲量が前年を上回っていることから、不漁であった2025年を上回り、平年並みと考えられる。

大阪湾では外海発生群が春から引き続き漁獲されるのに加え、内海発生群が6月以降にシラスとして漁獲されるようになる。大阪湾での卵仔魚採集数から判断すると不漁であった2025年を上回るが、平年を下回ると考えられる。

播磨灘東部では内海発生群が漁の主体であり、6月の水温が低いほど7月~8月の漁獲量が多くなる傾向がある(図6)。播磨灘全体での6月の産卵量は2025年、平年を上回っているものの、水温はかなり高めである(平年値との差>+1.5°C、図5)。したがって不漁であった2025年を上回るが、平年を下回ると予測される。

播磨灘南西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量や仔魚採集数から判断すると、不漁であった2025年を上回るが、平年を下回ると考えられる。

播磨灘北西部も内海発生群が漁の主体である。6月の産卵量から判断すると、不漁であった2025年を上回るが、平年を下回ると考えられる。

カタクチイワシ(小羽から大羽)

大阪湾では漁期当初に2025年発生1歳魚、その後は2026年の春シラス漁で漁獲の対象となった0歳魚が小・中羽として漁獲される。2026年5月のシラス漁は標本漁協では2025年、平年を上回ったことから、本漁期のカタクチイワシ(小羽から大羽)は不漁であった2025年、平年を上回ると考えられる。

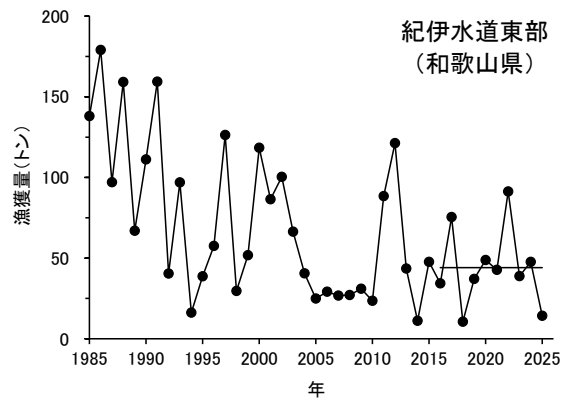
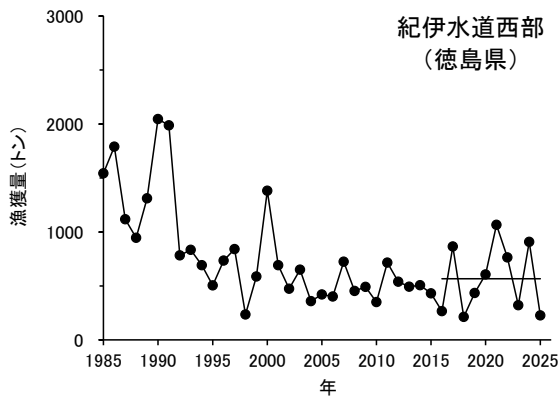


図1 紀伊水道の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

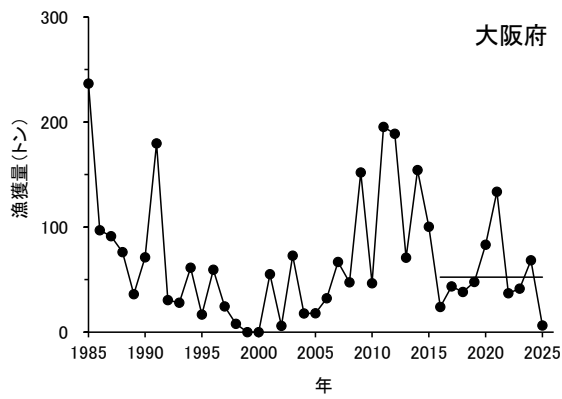
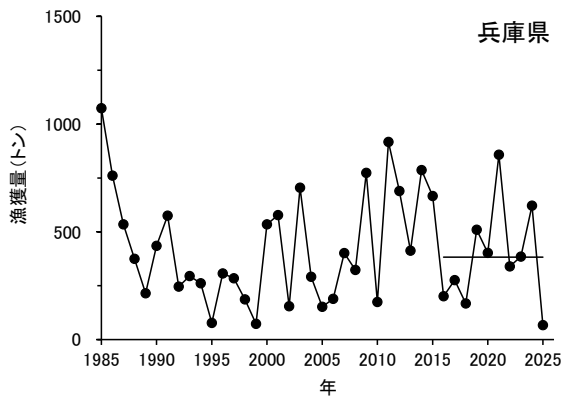


図2 大阪湾の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

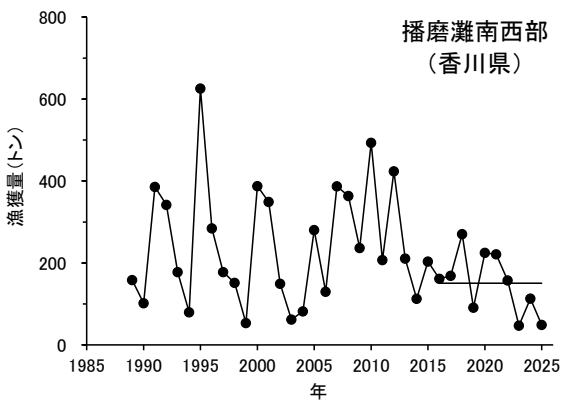
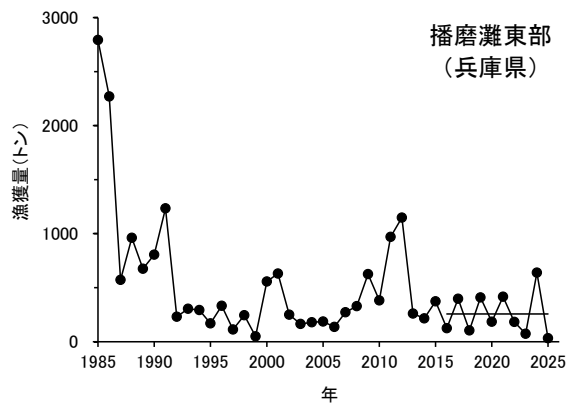
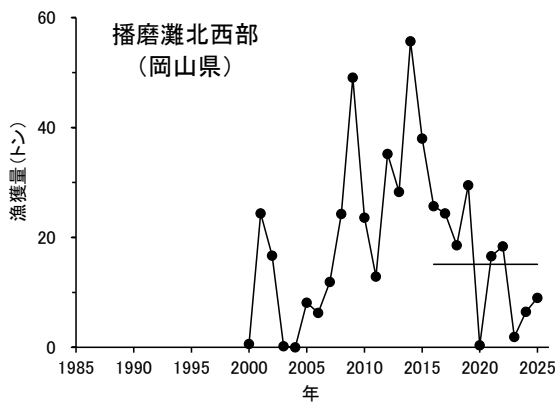


図3 播磨灘北西部の標本船、東部及び南西部の標本漁協における7月～8月のシラス漁獲量（実線は平年値）

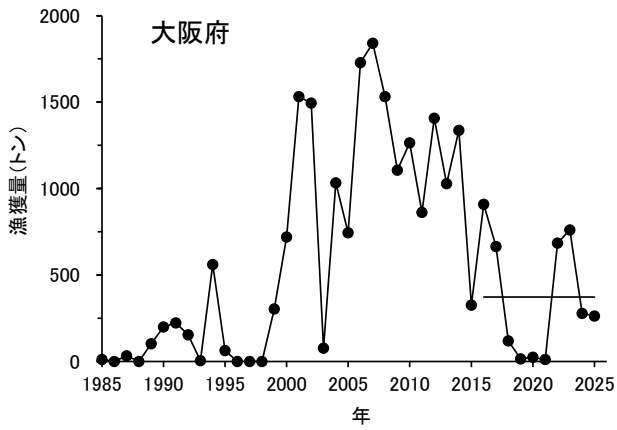


図4 大阪湾の標本船における7月～8月のカタクチイワシ漁獲量（実線は平年値）

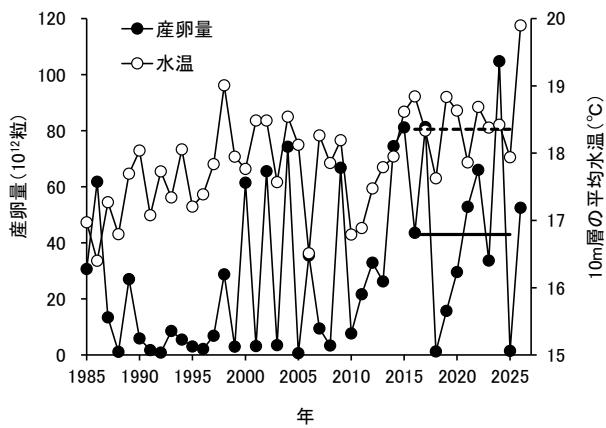


図5 播磨灘における6月の産卵量と10m層の平均水温（実線は産卵量、点線は10m層の平均水温の平年値）

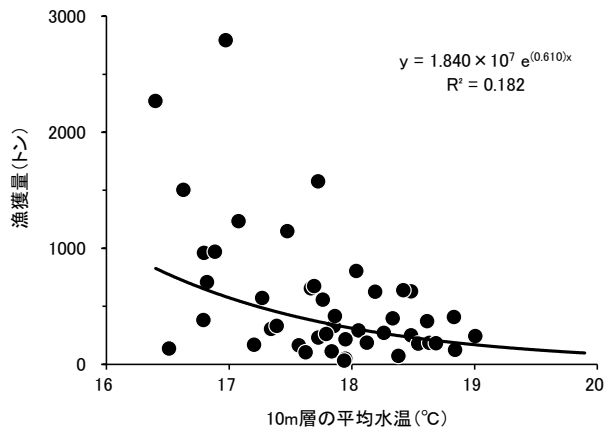


図6 播磨灘の6月における10m層の平均水温と播磨灘東部の標本漁協におけるシラス漁獲量の関係

参 画 機 関

<p>和歌山県水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター</p> <p>兵庫県立農林水産技術総合センター 水産技術センター</p> <p>岡山県農林水産総合センター水産研究所</p>	<p>香川県水産試験場</p> <p>徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
--	---